
車椅子と魔法少女

グラムサイト 2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

車椅子と魔法少女

【Nコード】

N4253S

【作者名】

グラムサイト2

【あらすじ】

8年前の冬の事件でエース・オブ・エースの高町なのはを庇い下半身不随になった少年はリンディの願いで機動六課に入ることになった。

少年は何を思うのか。

リリカルなのは始まります。

プロローグ（前書き）

車椅子と魔法少女始まります。

ブローグ

???「うん？一体こんな時間に誰だよ？」

と、文句を言いながら出ると、

???「こんばんはカムイ君、今、良いかしら？」

カムイ「悪いが良くないから二度と通信しないでください。」

と、通信を切ろうとしたら、

???「ちょ、ちょっと待ってカムイ君、少しで良いから」

カムイ「ならとつとと用件を言ってください。」

???「カムイ君、古代遺物管理部 機動六課に力を貸してくれないかしら。」

カムイ「お断りします。」

???「そんな、どうしても駄目なの？」

カムイ「当たり前です。なんで人の忠告も聞かず、自ら死に行くような奴や、友達が落ちただけで執務間に試験に落ちる奴や、身内や親しい人だけで部隊を作る奴の所で働くなんてまっぴらですよ。」

???「許してくれないの？」

カムイ「許すもなにもそもそも見舞い所か謝りにもこない。」

????「そ、それは」

カムイ「しかもかばった人が居た事を全然覚えていないみたいです。そこん所をどう説明するんですかりンディさん？」

リンディ「だって、その情報は・・・」

カムイ「消されてるですか？」

リンディ「ええ」

カムイ「残念ながら高町一等空尉が検索すれば出てくる仕掛けがしてありますから、その言い訳は通じません」

リンディ「・・・・それならどうすれば入ってくれますか？」

カムイ「そうですねーとりあえず俺はリミッターなしで」

リンディ「わかったわ」

カムイ「そして、俺の騎士達と使い魔を連れて行く。反論は認めないよ」

リンディ「仕方無いですね」

カムイ「まあ、文句言って来た奴は首にするけどな」

リンディ「冗談よねカムイ」

カムイ「冗談に聞こえるか？」

リンディ「やっぱり本気ね」

カムイ「当たり前」

リンディ「そう。じゃあこれだけ？」

カムイ「リンディ。貸し5ね」

リンディ「え、5は多すぎるわよ、せめて2ぐらいじゃないと」

カムイ「そうか、ならこの話は無かった事で」

リンディ「わ、わかったわよ」

カムイ「じゃあ一週間後の10時くだろ？だから一日前に行くから、情報を送つとけよ？」

リンディ「わかってるわ。ちゃんと贈つとくから」

と言って通信を切ると、

????「主、リンディ殿からみたいでしたが、要件はなんと？」

カムイ「うん？起動六課にいけて」

????「それにはもちろん連れて行ってくれるのですよね」

カムイ「ああ、もちろんだよシャイン。今度は騎士全員連れて行くよ」

シャイン「本当ですか主？」

カムイ「ああ、了解はとった」

シャイン「そうですか、この話を聞いたらみんな喜びますね」

カムイ「ああ、特にイリス辺りは尻尾を振りそうだな」

シャイン「そうですね」

と言った。

プロローグ（後書き）

前の小説読んでおかしかったので、書き直しました。

第一話 聖空と夜天（前書き）

はい、思ったより早く書けたので第一話登校します。

第一話 聖空と夜天

カムイ「個々が機動六課か」

シャイン「そのようですね」

????「だけどなんでわざわざこんな部隊を立ち上げたんだ？」

????「さあ、知らないし、興味もない」

????「でも、ここの部隊って魔導師ランク・Sが5人以上居る部隊ってどうなの？」

????「本当ーしかもわざわざ魔力リミッターまで付けて」

????「しかし、主、本当に良いですか？」

カムイ「何が言いたいんだヴォルフ」

ヴォルフ「いえ、高町の事なのですが」

????「ヴォルフ、今高町って言ったか!」

ヴォルフ「ああ、言ったが落ち着けイリス」

イリス「落ち着けるか、カムイが車椅子生活になったのは誰のせいか忘れたのかヴォルフ!」

????「それはわかってるが、落ち着かないか」

イリス「何でそんなに落ち着いていられるんだよ、アイシャ。おい
！！ミリア、アルト。お前らもなんか言えよ！！」

ミリア「えーと、なんかつて言われてもねえ？アルト」

アルト「ああ、主であるカムイが気にしていないのに、僕達が叫んだ所でどうなるんだ？」

イリス「だけどー！！」

カムイ「はい、そこまでそれより早くいくぞ」

アイシャ「わかりました」

イリス「あ、待ってよ」

と言つて六課に入った。

同時刻起動六課内。

???「うーん、カムイ・クナギサかー」

と少女が書類と睨めっこをしてたら、

???「はやてちゃんどうしたですか？」と15センチぐらいの少女が聞くと、

はやて「ああ、リインか。ちょっとこのデータなんやけど」

リン「そのデータがどうかしたですか？」

はやて「いやな、リンディさんが推薦してくれた人なんやけど、ちょっと、これみてみい」

と、リン見せると、

リン「何かおかしな事が書いてあったんですか？」

はやて「いや、階級が書いてなかったから、一体どついつ事やる思つて」

リン「うーん、以外に外部協力者なんじゃないんですか？」

はやて「そうなんかなー」

リン「そうですよーあ、そう言えばその人はいつ頃来るんですか？」

はやて「今日こつちに挨拶に来るらしいで」

と二人で話していたら、

???「失礼します。八神部隊長。明日から異動してくるって言ってる人が八神隊長に挨拶をしたいと言ってるんですが」

はやて「ん？もう来たんか？了解や。隊長室に通してあげて」

???「はい、わかりました」

――
――
はやて「えーと、カムイ・クナギサ君やったっけ？」

カムイ「はい、カムイ・クナギサです。八神はやて二等陸佐」

はやて「はやてでええよクサナギ君」

カムイ「じゃあ僕もカムイで良いですよ」

はやて「じゃあカムイ君後ろの人たちは？」

カムイ「ああ、彼らは僕の家族で聖空の守護者達と僕の使い魔」

はやて「聖空の守護者」

カムイ「そう、みんな自己紹介」

シャイン「私は聖空^{せいくう}の書の管理人格のシャインです」

アイシャ「嵐雲^{らんうん}の騎士アイシャ」

ヴォルフ「雷晴^{らんせい}の守護獣ヴォルフ」

ミリア「雨^{あめ}の騎士ミリア」

アルト「霧^{きり}の騎士アルト」

イリス「カムイを守る使い魔イリス」

カムイ「そして、聖空の主カムイ・クナギサ」

はやて「聖空の書？」

カムイ「夜天の書の元となった本。つまり源書ですよ」

と、言った。

第1話 聖空と夜天（後書き）

はい、はやてと話しました。

せて、次回は守護騎士達と話します。たぶん。

第二話 聖空と聖空の騎士達（前書き）

はい、待ってた人も待ってなかった人もお待たせしました、第二話、
聖空と聖空の騎士達始まります

第二話 聖空と聖空の騎士達

はやて「なあ、疑うわけや無いんやけど、その聖空の魔導書って言うのは本当に夜天の魔導書の原書なん？」

シャイン「そうですよ。何故なら「はい、ストップ」主」

カムイ「その話ははやての守護騎士込みでの話が良いでしょうから。それに僕はこの通り座って居るから良いもののシャイン達は立ちっぱなしですから」

と車椅子を撫でながら言うと、

はやて「それもそうやな。よし、食堂で話そうや、そろそろ昼食の時間やし」

と言っていちろ食堂を目指した。

- - -
- - -
- - -

カムイ「さて、食事も終わりましたし、守護騎士の皆さんも揃ったみたいなので、早速お話ししよう」

と言って一冊の本を取り出し、

カムイ「これが、聖空の魔導書、夜天の魔導書、いや、全ての魔道書の原書です」

???「これが、夜天の魔導書の原書」

???「でもよーシグナム。あたしはそんな話聞いた事無いぞーシヤマルはどうだ？」

シヤマル「私も聞いたことはありません」

カムイ「まあ、聞いたこと無くて当然ですよ。この魔導書は絵本の中、つまりおとぎ話でしかシグナル達が活躍していたベルカの時代では語り継がれていませんから」

???「ふむ、もしかして『赤騎士と姫物語』か？」

カムイ「そうです」

はやて「『赤騎士と姫物語』ってどんな話なんザフィーラ？」

ザフィーラ「『赤騎士と姫物語』は簡単に説明すると、何事にも無欲な少年が家族を助ける為に騎士に入るが周りについていけない、騎士を辞め、今までの給金を家に入れ、一人旅に出かけ、行き倒れていた老婆を助けた。その老婆がお礼をしないと、少年はそれを断ると老婆が少年の目の前で若い女性にかわると、「私はあなたのような人を待っていた。あなたなら私のマスターにふさわしい」っと、言つて懐から一冊の本を渡し、一緒に旅に出てある塔に封印されていた姫を助け出す物語です。」

はやて「へーそんな昔話があつたんや」

???「それより、カムイだったけ、お前」

カムイ「そうですよ、ヴィータさん」

ヴィータ「なあ、お前前にどっかで会ったことないか？」

カムイ「会ったことありますよヴィータさん、覚えていないんですか？」

ヴィータ「覚えてない……ってまさか、お前はあの時なのはを庇った」

カムイ「ええ、あのとき高町を庇ったのは自分です。そして」

と、視線を自分の足に向け、

カムイ「動けなくなつた原因ですよ」

と、言うと、

はやて「それ、ほんまなんカムイ君」

カムイ「ええ、本当ですよ」

はやて「でも、被害者は……」

カムイ「ええ、ニュースで流れたのは高町だけですよ。上から情報規制がされたんですから。まあ、理由はそのうち教えますよ。まだ、これはあなた達を知るには早い事ですから」

はやて「そっなんか」

と、少し落ち込みながら言ったら、

ヴィータ「なあ、カムイ、お前なのは事怨んでるか？」

カムイ「なに当たり前の事をいつてるんですかヴィータさん。怨んでないわけじゃないですか？」

ヴィータ「で、でもなのは情報規制のせいで知らなかった訳だし」

と、おずおず言うが、

カムイ「何言ってるんですかヴィータさん。高町だけ、情報規制から外されているんですよ？」

ヴィータ「それはどう言う意味だ、カムイ！！」

カムイ「簡単な事さ、ただハッキングしただけ」

シャル「ハッキングってそんな簡単にはできないはずよ？」

カムイ「そんなことはない、けっこう簡単にできるぞ？それこそたった一人だけに情報を提示させるのも」

と、言い切ったら、

ヴィータ「なあ、カムイ、お前はなのはをどうしたいんだ？」

カムイ「そうですねー俺はとりあえず自分の意思で、誰にも言われるでなく、自分で調べた情報で、謝りに来るなら、許すが、それ以外なら絶対許さない」

イリス「甘いよカムイ！！私は絶対何があっても許さない！！絶対同じ目にあってもらわなきゃ気がすまない！！アイシャ達も同じキモチでしょ！！」

アイシャ「そうだな、イリスほどではないが、私達も大体は同じキモチだ」

と、言った。

第二話 聖空と聖空の騎士達（後書き）

まあカムイより、騎士達の方が怒るのは、無理無いでしょう？
それは騎士として当然！！

次回はたぶん六課での立ち位置の確認かな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4253s/>

車椅子と魔法少女

2011年5月15日01時55分発行